様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ２００５２

研究課題名（和文）カンボジアにおける初期国家の展開と地域間交流に関する考古学研究

研究課題名（英文）Archaeological Study on the Development of the Early State and Interregional Interaction in Cambodia

研究代表者
横山　未来（YOKOYAMA, MIKU）

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：７０９０６７００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は先アンコール時代の都市遺跡を対象として、文字史料と考古資料の比較から、カンボジアにおける初期国家の形成・発展過程と交流の実態を解明することを目的とした。これまでの研究では、文字記録が残る紀元後3世紀以降とそれ以前の研究で大きな乖離が生じており、国家の形成・発展過程の一連の詳細な様相は語られてこなかったが、考古遺物の分析を行うことで、先史時代からの域内での交流を核として文化圏が形成され、長い年月のなかでの周辺地域との接触・交流を通じて外来の新しい文化要素・技術を取り入れながら、先アンコール時代に国家として発展していった様子を物質文化の側面から具体的に明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、①カンボジアにおける文献研究と考古学研究、②先史時代と先アンコール時代の連続性、③ラオス・ベトナムに位置する先アンコール時代遺跡との比較研究、④同時代の周辺地域（周辺諸国）との比較研究、⑤民族事例の考古学調査への援用という方法をとることで、これまでの歴史研究で脆弱であった各分野・各地域の研究を繋ぎ、横断的に検討するという点に学術的意義がある。また、これらの成果をカンボジアおよび日本の学会・論文で発表するとともに、一般・子ども向けの展示やワークショップに活用し、社会還元を目指していく予定である。

研究成果の概要（英文）：　This study aimed to elucidate the formation and development process of the early Cambodian state and the actual state of exchange through a comparison of archaeological data and written records of pre-Angkorian urban sites. Previous studies have shown a large discrepancy between the period after the 3rd century AD, when the written records were preserved, and the period before that, and have not described a series of detailed aspects of the formation and development process of the state. Through the analysis of archaeological artifacts, I have clarified the specifics of the development of the pre-Angkorian state from a material culture perspective, incorporating new foreign cultural elements and technologies through contact and exchange with neighboring regions over a long period.

研究分野：東南アジア考古学

キーワード：カンボジア　初期国家　先アンコール時代　土器　交流関係

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

東南アジアでは、紀元前後ごろから、国家形成の気運が高まり初期国家が成立した。交易を通して、インドや中国からの文化要素を取り入れながら、独自の発展を遂げていったと考えられている。カンボジアでは、この時代を先アンコール時代と呼び、紀元後３世紀前後に成立した初源的な政体が、領域的な古代国家へと成熟していく時期にあたる。漢籍で扶南・真臘とよばれるこれらの初期国家は、東南アジア大陸部における国家形成やのちのアンコール王朝の成立を知る上で重要である。

カンボジアの前近代の物質文化は、内戦とその後の混乱による研究の立ち後れから不明な点が多く、特に先アンコール時代の出土遺物の体系的な研究は現在に至るまで行われていない。また、９世紀のアンコール王朝成立以前の層位からは年代決定の指標となる貿易陶磁器は出土せず、出土量が豊富な土器を中心とした考古遺物の型式学・編年学的研究が不可欠である。近年考古学的な発掘調査の成果も報告されるようになってきたが、主な研究の関心は 未だ建築遺構や美術資料に集中し、考古遺物に関しては特徴および簡単な分類が示されるのみである。また、いくつかの報告では、メコンデルタの遺跡間における物質文化の類似性が指摘されているが、一部の周辺遺跡との部分的な関連を示唆するにとどまっており、歴史的変遷に関する考察には至っていない。

このような学術的背景を受け、現在必要な研究は、カンボジアにおける初期国家の形成・ 発展過程を周辺地域との関係性の中で体系的に明らかにすることである。具体的には、各遺跡に関する文字史料および考古遺物から遺跡・地域間の交流関係を明らかにし、初期国家がどのように形成・発展していったかその変遷を追うことである。

２．研究の目的

本研究は、先アンコール時代の都市遺跡を中心に、漢籍や碑文などの文字史料の悉皆調査および考古資料の型式学・編年学的研究を行うことで、カンボジアにおける初期国家の形成・発展過程と地域間交流の実態を解明することを目的とした。

なかでも、真臘の王都イーシャーナプラに比定されるコンポントム州のサンボー・プレイ・クック遺跡群は、漢籍の表記と遺跡出土碑文に記された都市名とがほぼ完全に対応する東南アジア古代史では数少ない例のひとつであり、東南アジアにおける初期国家を研究するうえで重要な指標遺跡といえる。本研究では、唯一継続して層位学的な発掘調査が続けられている同遺跡群の出土遺物を基礎資料とし、東南アジアにおける同時代の都市遺跡と比較することで、メコン川流域に成立した初源的な政体が、領域的な古代国家へと成熟していく過程をより具体的に明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

碑文や漢籍などの文字史料と遺跡から出土した考古資料の比較・検討を通して、ミクロ、マクロな視点から、当時の社会背景を明らかにする。

［ミクロな視点］　カンボジアの国家形成期における都市の発展と域内交流
［マクロな視点］　カンボジアの初期国家と同時代の周辺諸国との地域間交流

文字史料に関しては、東南アジアの初期国家に関する記述が見られる漢籍や先アンコール時代の碑文の悉皆調査を行い、当時の社会について文字史料から復元できるデータベースを構築した。考古資料に関しては、サンボー・プレイ・クック遺跡群をはじめとする、カンボジアや周辺諸国の初期国家に関する近年の発掘調査成果を踏まえたうえで、土器を中心とする実際の遺跡出土遺物の技術・形態的特徴を観察し、層位ごとの器種組成および製作技術に基づいた変遷過程の把握を行った。そのうえで、最終的に、文字史料と考古資料の研究成果を総合的に考察することで、遺跡間の交流とその展開を時間軸に沿って復元することを目指した。

４．研究成果

（１）　文献史料の悉皆調査

東南アジアの初期国家に関する記述が見られる漢籍や先アンコール時代の碑文についての研究をまとめた文献を収集し、①史料（資料）名、②年代、③原文、④現代語訳（解釈）、⑤それらの関する研究成果・議論、⑥（碑文については）原位置等について、一覧表にまとめ、文献史料によって復元される当時の社会体制の把握を行った。

（２）　先アンコール時代遺跡の踏査およびマッピング

先アンコール時代の遺跡に関するまとまった情報が不足しているため、主要な拠点遺跡において踏査を行った。具体的には、クラッチェ州のサンボー遺跡、コンポンチャム州のバンテアイ・プレイ・ノコール遺跡、プレイ・ベン州のバ・プノン遺跡、カンダール州のスラエ・オンパル遺跡、カンポット州の洞窟寺院を訪問した。フランス極東学院が作成した遺跡地図を参照して各地点を巡り、①位置情報の記録、②建築物や建築部材、彫像および碑文などの記録（写真撮影）、③考古遺物の表採（土器・陶磁器など）を行い、GIS を用いて遺跡マップを作成した。

（３）注口土器に関する検討

先アンコール時代の出土遺物の大部分を占める土器のなかでも特徴的なクンディ/クンディカと呼ばれる注口土器に焦点を当て、研究史をまとめ、研究の現状と課題を抽出した。注口土器はカンボジアの土器で唯一型式学・編年学的研究が行われていることから、方法論を検討するうえでも重要な分析となった。

（４）　サンボー・プレイ・クック遺跡群における発掘調査

都市区の中心部に位置するマウンド（M90 地点）における発掘調査に考古学担当として参加した。ラテライトのテラス状遺構の内部より土器・土製品 670 点が出土した。壷・大型壷・注口土器・鉢およびストーブ・瓦・円盤型土製品からなり、従来報告されてきた先アンコール時代の遺物の特徴と一致する結果となった。下層では叩きづくりの痕跡をもつ土器が複数確認される一方、上層になると平底の土器や回転台の痕跡が見られる土器が多くなる傾向がある。これは伝統的な叩きづくりの基層文化に、外来の影響と考えられる回転台技術を用いた製作技法が導入されたことを示唆しており、周辺地域との交流を通じた技術革新に伴う国家の発展の一側面を見ることができる。先アンコール時代の土器の形態や変遷過程を考えるうえでは、製作技法に着目した分析が特に重要となる。

（５）　アンコール・ボレイ遺跡における考古遺物の資料調査

タケオ州のアンコール・ボレイ博物館に保管されている考古遺物は、土器（壷/注口土器/鉢/筒形容器/高坏/蓋/小型容器）・土製品（ストーブ/瓦/当て具/紡錘車）・石製品（摺り石/石器/当て具）、金属製品（銀貨/青銅製装飾品）・ビーズからなる。先行研究では、土器の胎土や文様などの特徴から３フェーズに分けられることが指摘されているが、器種ごとの変遷過程等は明らかにされていないため、発掘時の報告と照らし合わせより詳細な編年を検討した。アンコール・ボレイ遺跡では鉄器時代まで遡る遺物も多く確認されており、先史時代から先アンコール時代にかけての長い歳月のうちに都市として発展していった様子が伺える。土器に関してはサンボー・プレイ・クック遺跡群同様、回転台を用いて製作した資料が複数見受けられ、遺跡間で比較を行うことで、先アンコール時代の土器の製作技法の変遷および文化圏の把握が可能となった。

（６）　伝統的な土器づくり村における民族調査

製作技法に着目した観察を重視したが、技法や道具は各地域の環境によって大きく影響されるため、日本で培った知識に基づく検討では誤った解釈をする可能性がある。そのため、現在もカンボジア国内で伝統的な土器づくりを行っている 4 州の村を訪問して、各器種の製作工程と道具による痕跡を観察し、古代の土器に残る痕跡と比較することで、より正確な製作技法の把握を目指した。叩きづくりの場合、内面には当て具、外面に叩き板の跡が残る場合もあるが、外面は調整が綿密に行われ、成形の痕跡は失われることも多い。また当て具は土製・石製で遺物として残るが、叩き板は木製などの場合残らない。民族事例では、ヤシの枝を叩き板として利用して

いる場合も見受けられ、そのような可能性も視野に入れたうえで、古代の土器の製作技法を再考した。

（7） 先アンコール時代の土器に関するシンポジウムおよび土器づくりワークショップの実施

王立芸術大学とユネスコ国内委員会、文化芸術省と共同で、先アンコール時代に関するシンポジウムおよび各地方の土器づくり職人を招いた土器づくりワークショップを実施した。シンポジウムでは現在のベトナムとラオスで先アンコールの遺跡の調査を行っている研究者にも発表を依頼し、より広域的な土器の比較を行った。

（8） 周辺諸国との交流が伺える遺物の資料調査

同時期の周辺諸国として、チャンパー、ドヴァーラヴァティー、ピューがあげられるが、これらの地域の交流が伺える考古遺物に、土器・金属製品（銀貨・装飾品など）、ビーズ・塼仏がある。これらのうち土器・金属製品・ビーズについては多くの考古学研究が行われているが、塼仏は主に美術的な視点からのアプローチにとどまっている。塼仏は当時の宗教観とも密接に関連し、政治概念や最新の技術とともにインドをはじめとする地域間交流を通して受容された。そのため、本研究では、主に塼仏を対象に図像の再解釈を行うとともに、製作技術に着目した考古学的な視点からの比較・検討を行った。

本研究では、以上（1）～（8）までの調査を実施し、文字史料と考古資料の研究成果を総合的に考察した。カンボジアにおけるこれまでの研究では、文字記録が残る紀元後 3 世紀以降の研究とそれ以前の研究で大きな乖離が生じており、具体的な国家の形成・発展過程の様相は詳細には語られてこなかった。今回の調査では考古遺物の分析を詳細に行うことで、先史時代からの域内での交流を核として文化圏が形成され、長い年月のなかでの周辺地域との接触・交流を通じて外来の新しい文化要素・技術を取り入れながら、先アンコール時代に国家として発展していった様子を物質文化の側面から明らかにすることができた。今後は年代ごとの遺物の組成や土器の型式変化に加え、土器の胎土分析や植物圧痕分析などの科学分析なども行い、より多角的な視点からのアプローチを目指していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 横山未来	４．巻 186冊
２．論文標題 前アンコール時代の注口土器研究の現状と課題	５．発行年 2022年
３．雑誌名 史観	６．最初と最後の頁 117-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 横山未来、CHHUM Menghong	４．巻 25
２．論文標題 會津八一コレクション東南アジアのせん仏に関する一試論	５．発行年 2024年
３．雑誌名 早稲田大学會津八一記念博物館研究紀要	６．最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 YOKOYAMA Miku
２．発表標題 Characteristics of Archaeological Artifacts From Sambor Prei Kuk: Analysis of the Materials Excavated From the Previous Excavation
３．学会等名 22nd Congress of the Indo-Pacific Prehistory Association（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 横山未来、李承叡
２．発表標題 東南アジアの土器づくり―カンボジア・コンポンチュナン州の事例を中心に―
３．学会等名 早稲田大学文学研究科考古談話会
４．発表年 2022年

１．発表者名 横山未来
２．発表標題 東南アジアの土器づくり―カンボジア・カンポット州の事例を中心に―
３．学会等名 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会
４．発表年 2023年

１．発表者名 横山未来
２．発表標題 カンボジアにおける民族考古学の可能性―土器づくりを対象に―
３．学会等名 早稲田大学考古学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 YOKOYAMA Miku
２．発表標題 The ceramic culture in Sambor Prei Kuk
３．学会等名 The Traditional Ceramic Making in Cambodia（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
The Traditional Ceramic Making in Cambodia	2024年～2024年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
カンボジア	ユネスコ国内委員会	王立芸術大学	文化芸術省	